
日本キャリア教育学会ニューズレター
2022年度・冬号（2023.1.31発行）

発行：日本キャリア教育学会 情報委員会
<http://jssce.wdc-jp.com/>

※ニューズレターは基本的に春夏秋冬の年4回配信しています。
※2022年度の特集テーマを「キャリアの起承転結」と設定しました。
※ニューズレターのバックナンバーは下記URLから読めます。

http://jssce.wdc-jp.com/committee/information_comm/

+.....+

目次

【特集】 キャリアの起承転結
結末～第二のキャリアに向けて～

[本間啓二（日本体育大学 名誉教授）](#)

[渡部泰介（ピアニスト）](#)

[武内伸文（社会活動家）](#)

[菅原良（明星大学明星教育センター 特任教授）](#)

[尾崎保夫（秋田県立大学 名誉教授）](#)

[渡部昌平（秋田県立大学総合科学教育研究センター 准教授）](#)

[阿部千春（株式会社国際テクノセンター シニアコンサルタント）](#)

[白石和彦（NPO 法人二枚目の名刺](#)

[サポートプロジェクト事業ユニット事務局）](#)

【書評】

[『キャリア探索とレジリエンスー大学生に向けた効果的なキャリア支援とは一』 高丸理香（お茶の水女子大学）](#)

[『キャリア・カウンセリング・エッセンシャルズ 400』 市村美帆（和洋女子大学）](#)

[『Diversifying Schools: Systemic Catalysts for Educational Innovations in Singapore』 京免徹雄（筑波大学）](#)

【お知らせ】

[日本キャリア教育学会 第44回研究大会](#)のご報告

【特集】 キャリアの起承転結

結末 ～第二のキャリアに向けて～

アスリートのキャリア選択とセカンドキャリアについて

本間啓二

日本体育大学 名誉教授

本学のような体育大学では、それぞれの都道府県や地区、全国又は世界において優秀な競技力を持った選手が集まってきます。当然ながら競技を楽しむのではなく、アスリートとしての成功を目指して入学してきます。しかし、その競技における選手層の厚さ、レベルの高さや怪我などの理由から競技を離れていく選手も少なくありません。

競技生活を続ける選手の場合は、将来の職業よりも今、目の前にある試合の方が優先されます。余計なことを考えないで、次の試合に集中して全力を出せるように日々トレーニングを続けていくことがアスリートに求められているのです。怪我や技術力の面でレギュラーを目指せなくなった選手の中には、競技を離れた後の人生に不安が高まり、競技生活後の職業選択へと関心が高まっていきます。ですから本学の学生には、職業への関心を持ち始め、就職活動へのアクションを起こすのが、他大学の学生よりも遅くなる傾向があります。

ある監督の話では、本学のレギュラーですら、その競技の世界で生きていくことは難しいと聞いています。野球などプロスポーツのある競技ではプロ選手を目指すことができるが、それはスポーツの中でほんの一部に限られています。そのため多くの学生はこれまで続けてきた競技生活を卒業して、職業生活へとシフトしていくことを具体的に進めていかなければなりません。

プロの道がないアスリートは、セカンドキャリアを考えるのが早い傾向にあります。トップアスリートになれば、アマチュアでも企業のバックアップで競技生活を続けることもできます。プロもアマチュアも競技生活を終わるときには、新たな職業生活へと進んでいかなければなりません。

競技によって選手生命の長さに違いはありますが、職業生活への移行については、その時の環境や人脈、競技生活を通して身につけたスキルや産業・職業に対する興味関心によって選択されています。

卒業後も社会人として競技を続けるには、プロスポーツの選手になる場合、企業に就職して実業団に入る場合、スポンサーを依頼してプロ契約を結び競技を続ける場合などがあります。プロスポーツの場合は、野球では1軍、サッカーではJリーグ、相撲では幕内などでの活躍が求められ、アマチュアでは、オリンピックや世界選手権で優秀な成績を上げることが求められ、それが達成できなくなったら引退を選択するようになります。以下、社会人として競技を続け、その後のセカンドキャリアの選択事例について紹介します。

Mさんは、大学卒業後、東京電力へ就職、Lリーグ（現・なでしこリーグ）の東京電力女子サッカー部マリーゼに入団し、同年の新人王を受賞しました。その後、米国のプロリーグ・WPSのフィラデルフィア・インデペンデンスへ移籍し、その後、ジェフユナイテッド市原・千葉レディースへと移籍しました。FIFA女子ワールドカップのメンバーに選出され、準々決勝のドイツ戦では、決勝点のゴールを決め、日本女子代表はワールドカップで初めてベスト4に進出しました。その後、ジェフユナイテッド市原・千葉レディースからスペランツァFC大阪高槻に移籍し、その後、引退しました。引退後はホリプロと契約し、物おじしない明るい性格を活かして芸能界でタレントとして活躍しています。

Sさんは、高校から社会人まで17年間アメリカンフットボール選手として活躍してきましたが、31歳で現役を引退して働きながら大学院に入学しました。MBAを取得した後、15年勤めた有名電機メーカーを退職してNPO法人を設立し、学生のキャリア支援を目的として活動しています。彼は、卒業時に実業団に入るためにF企業に入社し、社員として平日の日中は働き、土日はアメフトを続けてきました。しかし、年齢と共に次のステップを考えるようになり、そのような中でアスリートの支援をしたいと考えるようになりました。そこでNPOを立ち上げて現在では、全国の高校や大学で若者に向けたキャリア講座を開催しています。

実業団のメンバーの中には、ずっと競技を続けたいと考える人と、そうでない人がいて、レギュラーメンバーから外されたり、年齢的にここには限界だと思ったりしたら、そのまま社員として会社に残るか、競技を続けるために他社に移るかを考えるようになります。怪我をしたり、契約解除

になって競技を断念したりした時には、飲食業、運送業等、スポーツとは全く関係の無い仕事を選ぶ人もいます。その時、どう考えるかで人生の選択は変わるものだと思います。その時に自分の周りにどんな人がいるかによって、人生の選択も影響を受けます。前向きなアドバイスをくれる友人は、ポジティブな人生の選択を後押ししてくれます。

アスリートは、今を一所懸命に練習して試合に全力を傾けているため、今後のことや将来を考えるのは一般的に遅いかもしれません。しかし、競技生活を通して身につけてきた経験やスキル、知識などを活かして、競技生活後のセカンドキャリアも新たな努力を期待することができます。

アスリートのセカンドキャリアは、一般論として語ることはできるかもしれませんが、実際には個々人の人生として多様であるし、個別で個性的なものです。アスリートとして身につけた能力には競技の特性によっても異なりますが、協力・協調力やコミュニケーション力、関係構築力、推理・洞察力、戦術・戦略のセンス、目標管理能力、耐える力、失敗や苦境から立ち上がる力、自制心など、切りがないほど挙げることができます。これらの経験に基づいたスキルは、十分に職業生活や社会生活で生かしていくことができると考えられます。社会での成功者の中には、スポーツの経験をその支えと語る人も多く、スポーツ活動を通して生き抜く強さや根力を身につけていると言えます。

競技後のセカンドキャリアも暫くすれば、また次のキャリアへとステップしていくことになり、このようなキャリア選択の積み重ねを通して、人生の中でキャリアの面からも成長・発展していくのではないのでしょうか。

ミュージシャンとしてのキャリア

渡部泰介
ピアニスト

クラシック教育を経ていない私が、ピアノで食べるようになったのは大学でジャズ研に入ったのがきっかけでした。1987年入学。この頃流行っていたのはキース・ジャレットのスタンダーズや、ウィントン・マルサリスの一連の活動などなど。ジャズは、常に変遷して新しくなっていくという考え方よりも、60年代までに出たジャズのやり方を洗練させて楽しみましよう、ジャズを古典芸能的に再定義する動きが始まったころだったと思

います。私の大学のジャズ研も、フュージョン全盛時代から少しずつ50年代60年代のビバップばかりやるサークルになって行きました（東京学芸大学の軽音楽部というサークルです。未だにそういうサークルとして続いています）。

本当は教員になる予定で入った大学なのに、部室にこもってジャズ漬けになっていたために、ダラダラと教職浪人していました。大学受験の時もそうだったのですが、モチベーションが十分に伴わないことで追い詰められると現実逃避してしまう傾向が強くなりまして…その現実逃避エネルギーへの振り幅がどんどん大きくなり、サークルの先輩や仲間が持ってくる仕事、ジャズバーでのBGM演奏、ラテンバンドの生演奏で踊らせるクラブ、キャバレーやダンスホールなどの音楽仕事に、とてもとても充足を感じるようになり、その上、仲間がレコードデビューしたり有名バンドに就いたり…音楽を仕事にすることへの思いがどんどん強くなって行って、最終的に大手テーマパークの仕事が決まった時に、音楽家になることを決めたのでした（大手テーマパークという用語をちょっと解説します。大資本の遊園地事業者の中に、夢と魔法を社是に種明かししないことを大事にする会社があります。そこは出演していることを明かしてはいけないという契約になっています。なので大手テーマパークと自己紹介に書いている人はその日本最大手テーマパークに関わった人が多いようです）。

そのテーマパークでは、主にハワイアンのショーに関わってました。楽器奏者が4人と歌手が1人。各パート2人ずつ交代で、月の半分ずつ受け持ち、月収としてサラリーマンの平均月収くらいの額を頂いていました。残りの月半分は他の仕事を好きに入れてました。学校を巡回する音楽鑑賞教室のラテンバンド、タップダンサーのためのジャムセッションをする仕事、ゴスペルグループの伴奏、そのゴスペルグループの歌い手が先生をする市民ゴスペルサークルの伴奏などなど頂く金額もいろいろで、1回8,000円～40,000円くらいの幅がありました。

どの仕事も、人からの紹介です。1つの仕事で信用を得て、その共演者や関係者から新しい仕事を紹介してもらいます。その形しかありません。失敗して信用を失うことも多くありましたが、信用を得て新しいステージをもらえる時は自信になりました。向き不向きや能力のある無しで言うと、私の場合、ピアニストとしては決定的に譜面が読めないのです。譜読みを要求される仕事がダメでした。もうほとんど残っていませんが、昔多くあったグランドキャバレーやダンスホールでは、長年使い込まれた書き込みだらけの譜面を初見で演奏するのが必須です。ピアニストというのは大抵譜面が読めるので、譜読みで要求されるレベルが物凄く高いのです。ダンス

バンドなどでは、びっしり書き込まれたピアノの譜面と同時に、アコーディオンの譜面も並べられて、適宜読み替えて両方演奏なんて物凄い要求もあり…。そういう現場ですっかり心折れてしまって、初見で読譜が必要な仕事はだんだん敬遠するようになりました。譜面を速読できるように努力すればよかったです。私の場合、自分で譜面を作れば手っ取り早く音楽が成立するだろうと譜面を作る作業に興味を持ち始めました。どの仕事でも、全部譜面に起こすことから始めるわけです。これは一長一短で、譜面を作ることによって曲の構造や背景が分かって楽曲理解は深くなるのですが、譜面を制作するには時間が持ち出しになるのです。もとより好きでやっていることなので苦になる作業ではないのですが、生活を考えるとこういうサービス残業的な時間をいかにコントロールするかが大事だったりします。気をつけないと最低時給どころではない。自分でやりがい搾取をしていたりするのです。譜面の話ばかりになってしまいましたが、譜面が読めないと音楽家になれない訳では必ずしもないというのがまた面白いところ。譜面を読むということは、事務におけるエクセル技能のようなもので(すみませんあまりわからずに喩えています)、出来なくても他でいくらかでも補えるものです。まあ、譜面に限らず音楽は、完成形から減点されていくものではないので、何か素晴らしく能力が飛び出していれば、誰かが補ってくれるのがまたいいところ。結果的に、私は、家族含め能力の偏在を補ってくれる仲間にも恵まれたなあと思っております。

後先考えない駆け落ち婚みたいに始めた仕事なので、今後の見通しに関してはあまり考えてないというのが正直なところです(考えられる人はもとより音楽家にはならないんじゃないかと…)。大手テーマパークは大幅に生演奏を減らしまして、私の契約も 2015 年で終わり安定的な収入も減りました。今後も、音楽家を続けていく意思は強いものの、2019 年からの 3 年は、惨憺たるものでしたのでこの先どうなるかは分かりません。時折、若くして亡くなった仲間のことを(音楽家のまま一生を終えた点で)、羨ましく思ったりもします。音楽以外の仕事をしたことがないので、適性がベストかどうかは分かりませんが、これまでやって来てストレスを感じたことはないので、低空飛行でも家計が回る限り死ぬまで音楽家でい続けたいと思っております。

武内伸文
社会活動家
元市議会議員

なぜ社会起業家を？なぜ政治家を？と聞かれることがありますが、私にとって理由は同じです。どちらも「社会をより良くしたい」を実現する手段です。

小さい頃からの夢でもなく、そのためにキャリアを積んできたわけでもありません。

さまざまな要因で変化した人生の節目において、目の前にある選択肢を選んだ結果です。結果論ですが、これまでの経験が、現在の仕事に役立っています。「社会をより良くしたい」という私の人生の軸が、関連した経験を積み重ねてきたのかもしれない。

社会人のスタートは、外資系経営コンサルティング会社でした。小さい頃から海外志向が強く、いつかは海外に関わりのある仕事で活躍したいという思いがあり、英語や IT スキルが身につくという魅力もあり、その会社を選びました。また、1年間で3年分の経験ができるというキャッチフレーズも、自分が成長できる環境に身を置きたいという私のニーズにマッチしたものでした。在職8年間で、20社近くのクライアント企業の変革をお手伝いしてきました。限られた期間のプロジェクトで顧客貢献を繰り返してきた経験が、「社会をより良くしたい」という現在の価値観の礎になっています。

入社から数年後に京都議定書が批准され、地球全体で環境社会へのシフトが求められていました。その頃から、私が経験してきた企業変革のノウハウが活かせるのではという気持ちがだんだんと強くなっていきました。その後30歳で会社を辞めて、英国ウェールズ・カーディフ大学の大学院に留学しました。環境も含めた持続可能な社会づくりをテーマに、エネルギー、公共交通、食、コミュニティなど多様な視点で都市計画を学びました。更に環境 NGO でのボランティアや日常生活から、誰もが気軽に社会活動に参加できる英国の成熟社会の風土を体験しました。これらの経験がその後の社会起業家の礎になったと思います。

大学院卒業後のヨーロッパ各地での就職活動中、実家から「家族（父、母、二人の兄）の交通事故」の一報があり、人生が一転しました。英国の暮らしを引き上げ、故郷の秋田で介護生活が始まります。家業の経営をサポートしながら、プライベートの時間はほとんどない状態が続きました。

帰郷して1年経った頃、自分が学んできた企業変革やまちづくりのノウハウを故郷に生かしていこうと考えました。まずは隙間の時間を使い市民活動をスタートしました。英国のチャリティショップをヒントにしたチャリティリサイクルショップ「わらしべ貯金箱」、ドイツ発祥の自転車タクシー「ベロタクシー」の運行、商店街や飲食店を練り歩く「商店街スゴロク」や「アキタ・バール街」、市民活動団体による歓迎パレード「市民パレード」、新年を占う雪上網引き「新春！夢網引き！！」など、市民が街を舞台に活動するきっかけづくりを仕掛けていきました。活動への賛同者は、徐々に増えていきました。

帰郷して10年が経ち、周りからの政治家にとの声も多くなり、更には、より社会の変革のスピードを上げたいという自分の気持ちが決め手となり、秋田市議会議員になりました。

議員の仕事は、地域課題に向き合い、行政予算を審議し、政策提言などをすることにあります。そのため、経営コンサルタント、まちづくり研究、そして市民活動といったこれまでの経験を発揮できる場であり、やりがいのある仕事です。

議員活動を通じて、政治が社会のすべてとつながっていることを実感しました。24時間365日アンテナを張り続け、多種多様な方々とお会いすることは、多くの学びや気づきがあると同時に体力も必要です。また、政策を実現するまでに多くの関係者との調整や段取り等が必要になります。交渉やプレゼンテーションの力が重要になってきます。

議員として、やりがいを感じながらも、社会変革の更なるスピードアップも必要だと感じていました。そして6年目で、議員を辞職して秋田市長に立候補しました。結果は実を結びませんでした。地域がより良くなるためという行動に悔いはありません。引き続き、政治を通じた社会変革に取り組んでいきたいと思っています。

最後に、私が考える政治家にとって最も重要なことは「大義を持ち続ける」ことだと思っています。受け止めた意見をそのまま右から左に送るメッセージではなく、自らの足元を気にする利己的な行動でもなく、自分が何を大事にしている、社会で何を成し遂げたいのか、そのような軸を持った政治家が求められます。様々なバックグラウンドや専門性を持った人材も必要だと思います。是非、そのような方々により積極的に政治の世界で活躍してほしいと思っています。

人生 100 年時代でいう折り返しの年齢となりましたが、未だ明確な人生のゴールは描けず、走り続けています。現時点でのゴールを定義するとしたら、できるだけ多くの笑顔の軌跡を残し将来に良いバトンを渡していくことだと思っています。

投資家・行政書士へのキャリア

菅原良

明星大学明星教育センター 特任教授

私の「現在」の職業は大学教員です。

耳順の年を目前にして、自分の生き方を考える時間が多くなったような気がします。

私の人生は（勝手に思っているだけかもしれませんが）なかなか波乱万丈で、絵に描いたような美しいものではないことをご了承いただき、ご笑覧いただけましたら嬉しい限りです。

さて、まず私の大学入学の動機が不純なもので、目指していた大学に合格することができず、唯一受験した法学部に入学してしまったことが、その後のキャリアに大きく係わってきます。

2 年生の時、ゼミの先生に「法学部に入ったからには、法律に関係する資格を取ってみてはどうか」と勧められて取ったのが行政書士の資格でした。しかし、当然ではありますが、社会を知らない大学 2 年の若造が簡単に始められる仕事ではないことは自分でも分かっておりましたので、開業するつもりもなく 30 年余りが経ちました。

学生るときには、なんとなく公務員になることを目指すことにし、地方公務員から国家公務員までいくつかの試験を受験し、運良く全ての試験に合格することができました。

そこでどの道を進むべきかを安易に考えた結果、裁判所書記官としての道を進むことに決めました。ところがここで、可笑しなことを考えてしまいました。裁判所から伝えられた配属先として打診されたのが東北の日本海側の小さな都市だったのです。「こんな田舎では、社会人生活を謳歌できないではないか」と考えてしまいました。当時は、バブル経済が崩壊したとはまだ誰も気が付かないくらいに求人が数多の時代でした。民間企業の面接には交通費、宿泊費、それに加えて飲食代まで企業が負担してくれた時代です。私の気持ちは、あっという間に、民間企業就職に傾いてしまいました。そこで就職したのが誰もが知る物流会社のシステム開発部門でした。そもそも情報工学を学べる大学に進もうと考えていた私にとっては、渡りに船でした。

ところが、当時のシステム開発は、Windows などという OS はまだ開発されていない時代で、フロッピーディスクを何枚も PC に抜き差ししながら MS-DOS 上で作業を行わなければならない、今では想像すら難しい家内制手工業を地で行くような苦難の時代でした。仕事は積み上がり、当然のように帰宅するのはいつも午前 0 時を廻っていましたし、一週間会社に泊まり込みなんてことも普通にありました。自分では良く頑張ったと思いますが、酷い労働環境が影響したのかはわかりませんが、身体を壊してしまい、もう少しで入社 3 年という 12 月に辞めることになってしまいました。

そして、翌年から専門学校の教員として働くことになり、教育の道に足を踏み入れることになり、そして 30 代前半に公立高校の教員に採用されました。しかし、ここでまた、「私の目指すものは高校教員ではない」と考えてしまったのです。1 ヶ月で高校教員を辞し、研究者を目指すことにしました。

そうは言っても、研究者（大学教員）などを目指したところで、簡単になれるような職業ではありません。つまり、目的を達成できない場合のことも考えなければなりません。

そこで始めたのが株式投資（つまり今でいうところの「投資家」）です。

株式投資にはずいぶん助けられました。株式投資は勇気がいるので、今では思い切ったトライをしようとは思いませんが、大学院に通いながら 2～3 年は株式投資だけで生計を立てていました。

年間で 3 億円ほどの取引を行っていたのがこの時期で、証券会社の支店長さんが挨拶に見えられるほどの取引量だったらしいです。ここで学んだ株式投資の知識はいまでも役に立つことが多くあります。本気で取り組みば今でも年間 1,000 万円程度は稼げるのではないかと思っています。

そうしているうちに、ご縁をいただいた東北学院大学で非常勤講師として 7 年間お世話になり、その間に東北大学で博士号を取得し、運良く北海道文教大学に採用していただきました。その後、北海道に 3 年、秋田大学に移って 2 年、そして現在の勤務先である明星大学に 2015 年 4 月に赴任して今に至ります。

明星大学に赴任して 7 年が過ぎ、親戚も少ない東京で働くこと、コロナ禍に直面したこともあり、これからの自分の生き方を考えることが多くなりました。私のような地方出身の人間にとって、東京はあまり快適な場所ではないことに気が付きました（まず、物価が高いこと。そしていつも競争しているように感じる人の多さ。若い夫婦が小さな子どもを早朝から預けて働かなければ生活していけない息苦しさなど）。

こんな紆余曲折を経て、2022 年 6 月に札幌に行政書士事務所を開業しました。開業したといっても事務所を設置しただけで、まだ実務をバリバリ進めるには至っておりませんが、これからの人生を考えるには必要なことだと思っています。

また、暫く遠ざかっていた投資家としての活動も再開しました。投資家をやっているのと、ある程度は経済の先読みをすることができるようになります。「現在」の職業を辞した後の人生を精神的にも経済的にも充実したものにしていくためには、十分な「仕掛け」ではないかと思っています。

行政書士はたまたまゼミの先生に勧められたもの。投資は研究を優先することを目的として時間を拘束されない生活を行うために、たまたま出会ったものですが、30 年余りを経てこれからの人生を考えていこうとする今、自分の第二の人生を彩ってくれるようになるかもしれないとは考えもしておりませんでした。

人生なんて、そんなものなのですかね。

退職後の充実した農的生活をめざして

尾崎保夫

秋田県立大学 名誉教授

〈はじめに〉

私は大阪府立大学農学研究科修士課程を修了後、大阪大学環境工学科水質管理工学研究室で12年、農水省農業環境技術研究所資源・生態管理科で4年半、農業研究センター土壌肥料部水質保全研究室で13年半および秋田県立大学生物環境科学科生態工学研究室で13年、研究・教育の仕事に従事し、2015年3月に定年退職しました。在職中は、主に水質浄化、環境保全・修復に関する研究を行っていました。

退職後は、つくば市上郷の自宅に戻り、果樹や庭木の栽培管理と野菜や果物を用いた浄化槽処理水の高度処理試験などを行っています。ここでは、つくば市上郷にどうして住むことになったのか、現在の農的生活の楽しさなどについて記すとともに、今後の生き方についても考えてみたいと思います。

〈豊里町上郷への転居〉

農業環境技術研究所に転勤になった時（1984年4月）は、長女が5才、次女が2才で、茨城県谷田部町松代の公務員宿舎に入りました。公務員宿舎は、幼稚園、小学校、スーパーマーケットなど生活に必要な施設は徒歩15分圏内にあり、たいへん便利でした。私は農家出身ですので、子供達にはできるだけ土や自然と親しむ生活をさせたいと考えていましたが、公務員宿舎にはそういう場はありませんでした。公務員宿舎に住んで1年半余りたったころ、農村地域（豊里町上郷、現在；つくば市上郷）の売り家の新聞広告が目にとまりました。当時、牛久沼集水域の調査研究を行っており、月に1回は近くに調査に出かけていましたので、さっそく、ハイキングを兼ね家族で家を見に行きました。家は築5年で畑もあり、小学校にも近いので購入を決めました。

その年の春にサツマイモを植えたところ、大きなサツマイモがたくさん収穫でき、子供達も大変喜んでいました。栗の樹の横に子供の遊び小屋、鉄棒、鶏小屋などを作り、家族で農的生活を楽しみ始めました。その後、

子供達が喘息で入退院を繰り返したため、妻は安全な野菜を子供達に食べさせるため、家の両側の畑（約 2,000 m²）を借り、農薬や肥料を使わない自然農で野菜や豆などを作り始めました。私は上記農水省の研究機関に 18 年間勤務後、秋田県立大学に移ることになりました。

〈退職後のつくば市上郷での農的生活〉

秋田県立大学では、生物環境科学科生態工学研究室の教授として、環境生態工学、環境生物工学などの講義を担当すると共に、八郎湖の水環境の保全・水草再生、有用植物を用いた農業集落排水の資源循環型浄化システムの開発などの研究に従事していました。

秋田県立大学で 13 年間勤務後、2015 年 4 月に、つくば市上郷の自宅に戻りました。1 年目には、残務整理と妻が維持管理していた自然農畑に、栗、りんご、ブルーベリー、ヤマモモなどの苗木を新たに植え付けました。また、畑の一面に小玉スイカの苗を 5 株植えたところ、小玉スイカが 78 個も収穫できました。

退職 2 年目には、有用植物と天然鉱物濾材を組み合わせたバイオジオフィルター水路（B G F 水路）の普及を図るため、ホームセンター等で購入できる資材を用いて、簡易 B G F 水路を自宅横の畑に設置し、野菜や果物等を用いた浄化槽処理水の高度処理試験を再開し、得られた成果を学会等で発表しています（※1・2）。簡易 B G F 水路で生産されるトマト、いちご、トウモロコシ、パッションフルーツ、サニーレタス、シュンギク、スナックエンドウなどは夫婦 2 人では食べきれないので、子供や孫達にも食べてもらっています。本浄化システムは、SDGs に適合した生活排水の省エネルギー・資源循環型浄化システムなので、水資源の少ない離島や開発途上国などでも活用頂きたいと考えています（※1）。

退職時に植えた栗の樹（2 本）は大きく生長し、5 年目からは毎年 13～15kg の栗が収穫できています。また、登熟したヤマモモの甘酸っぱい味は、少年時代の和歌山での農村生活を懐かしく思い出させてくれます。現在、14 種類の果樹を植え、四季収穫が楽しめるよう栽培・管理を行っています。退職後、時間に余裕ができましたので、果樹や庭木と対話しつつ 3～5 年先を想像しながら各樹種の剪定を行っています。剪定作業は私にとって最高のリフレッシュで、新たな発見の場でもあります。

〈ベビーブーム世代の老後の生き方〉

私の育った時代は、現在のように便利で、ものがあふれていませんでしたが、高度経済成長期で、国民はそれぞれ将来に夢や希望をもてた時代だ

ったように思います。また、大学や研究機関等では人を育てる気運が高く、私は上司や先輩などに育ててもらったと心より感謝しています。現在は効率最優先の競争社会で、社会や個人に余裕がなくなって来ていると感じています。特に、コロナウイルスが蔓延し始めた 2020 年以降は、テレワークや在宅勤務などで人との交流・信頼関係が希薄になり、ストレスで体調を崩したり、引きこもりになったりする若者が増えています。一方、野菜や果樹はコロナに関係なく生長し、収穫を楽しむことができますので、私達の生活はコロナ前と余り変わっておりません。

これまで、多くの方々にお世話になり生きてきましたので、我が家の自然農畑や果樹を利用した園芸療法で引きこもりの方々の社会復帰のお手伝いなど、これまでの経験を生かした社会貢献ができないか模索しています。体力がだんだん衰えてきましたが、この激動の時代に「人として、如何に生きるべきかを問いつつ、孫や教え子たちの成長を見守るためにも、妻と一日一日を大切に、自立した生活を続けて行きたい」と考えています。

〈参考文献〉

- ※1 尾崎保夫：野菜や果物を用いた浄化槽処理水の資源循環型浄化システムの開発 ―連作障害対策の効果と収穫野菜等の安全性について―、浄化槽研究、32(1)、1-8 (2022)
- ※2 尾崎保夫：生活排水はすぐれた肥料液 ―野菜を育てて、水質浄化に貢献しよう！―、気候変動対策フォーラム、つくば国際会議場(2022 年 9 月 4 日)

これまでの選択を振り返り、資格試験の勉強を通して見えてきたこと

渡部昌平

秋田県立大学 総合科学教育研究センター 准教授

今年で 51 歳になりました。学部で心理学を学んだのち院に進学してカウンセリングで修士号を取ったものの、当時は院生向けの常勤カウンセラーの募集がほとんどなく(実は福島か鹿児島なら可能性があったのですが、そのまま地方に埋もれるのではと応募せず。今は秋田ですけれども)、初職は国家公務員として霞ヶ関に勤務しました。この時に常勤カウンセラーになっていたら、今とは全く別の人生を歩んでいたと思います。中央官庁に

入省し、出向したハローワークでの仕事は楽しかったものの、どうも目の前の人が想像できない霞ヶ関の仕事が楽しくない。そう考えて細々と論文を書いたり資格を取得したりし、小学生2人の子どもを抱えて12年前に現職に転職しました。学ぶのは好きなので研究職は楽しいですし、学生に教える教員の立場もやってみたら楽しい。いい講義をすると学生の反応が違います（教養科目の担当なので、学生との距離が少し遠いという点がありますが）。

大学ではキャリア教育を担当していますが、学生を煽るために時々資格試験を受けています。受けてみて改めて分かるのは、自分の興味や関心です。F P 2 級は受かりましたが簿記3級は途中で飽き、行政書士は箸にも棒にもかかりませんでした。会計や法律は自分ではあまり興味がないようです。終活アドバイザーの資格も取得しましたが、あまりピンと来ず。ロシア語講座や日本語教育能力検定の勉強は楽しくできました。ロシア語講座を学ぶことで「いつかサハリンに」という夢ができましたし、日本語教育能力検定のおかげで「引退後は外国で日本語教員」という想像をふくらませました。日本語サポーターというボランティアな仕事にも興味を持っています。そういえば学生時代、心理学30単位のほか語学10単位も取っていたのです（英語は苦手なんですけれども）。秘書検定2級は「社会人ならあまり勉強せずとも受かる」と聞いて、受けたら合格しました（笑）。短大などに転職するときに使えないかな、と思っています。

ちょっと前まで、過去の行政経験を生かして次の仕事は（知事や市長と知り合えたら）副知事や副市長など「特別職の公務員」もいいかなと思っていましたが、その気持ちはだんだん弱まっています。知事や市長の知り合いもいませんし。

食べることや料理を作ることも好きなので（時々レシピコンテストにも応募しています）、ソムリエやフードコーディネーターなどの資格にも興味がありますが、気取った店で気取って食べるより安居酒屋の隅でお銚子を空けているほうが自分には合っている気がします。1年ほど前は「日本語教育能力検定試験が終わったら、次は食品系資格」と思っていたのですが、今は新聞記事に影響されて「まずはITパスポートなど情報系資格」とも考えています。でもIT系への転職はこの歳では厳しそうです。過去にはB級ライセンスなどの取得を考えたこともありましたが、取らなかったのはやはり「学生を煽る以外に使い途がない」からかもしれません。

社会の変化が激しい現代では、自分なりに将来予測をしながら転職をしたり転職の準備をしたりすることが増えてくると思います。若いうちの可能性は無限大ですが、知識や経験を積み、歳を重ねるごとに可能性は狭ま

ってきます。これまでの知識や経験を踏まえ、あるいは新しい知識や経験、資格等を取得することで未来を切り開いていくわけですが、大人と雖もやってみないと分からないことはたくさんあります。資格取得のための新しい知識の習得も、一朝一夕に身に付くものではありません。

私は一定の時間と努力が必要な資格試験の勉強を通じて自分の興味・関心を改めて確認し、自分の将来（私の場合はサードキャリア）の可能性を探っています。それは両親が北海道出身の次男次女で、継ぐべき名前ものれんも資産も土地もない、自らも次男であるということも影響しているのかもしれない。子どもの教育等の関係で今の仕事をあと5年は継続すると思いますが、さて私のサードキャリアがどうなるか、まだ自分でも分かっていません（今の仕事を続ける可能性も高いです）。教育に関わることには大いに関心を持っていますが、公認心理師の資格取得は目指さず、サイコセラピーのほうには進まないだろうと思っています（でもこういうのは「時の運」もありますしね）。

昔は（実は最近まで）親が金持ちとか社長とか有名人という人に「羨ましい」という気持ちが強くありましたが、そういう人は親や周囲からのプレッシャーも大きいでしょうから、「自分で自分の人生を自由に切り開く」というのも悪くないのかなと思えるようになってきました。自分自身そんなに人生でチャレンジをしてきたわけではありませんが、「まあまあな人生」を歩んできたかな、さて次はどうしようかな、と考えているところです。客の少ない喫茶店のマスターになって、変なメニューを開発するのも楽しそう。

引退無用のライフタイム

阿部千春
株式会社国際テクノセンター
シニアコンサルタント
保健学博士

開発コンサルタントという職業に就いて30年が過ぎた。専門は保健医療。医師ではないが保健学の学位だけはもっている。国際協力機構(JICA)のプロジェクトで被援助国の医療従事者に技術指導を行っている。すでに還暦を超えたが、まだ引退できそうにない。

子どもの頃、将来の夢を聞かれるのは苦手だった。何になりたいかわからなかった。大学4年生の時、国際交流を行う機関の採用試験を受ける気になったが、その年は不況で採用試験がなかった。そうこうするうちに、同級生だった彼氏との結婚が決まって専業主婦への道が開けた。と思いきや、結婚後も、出産後も、何故かいつも仕事があった。日本語教師、博物館の事務兼通訳、英会話学校のアメリカ人校長秘書など、いろいろやった。20代後半でコンピュータのシステム開発に従事し、これが本業だと思うようになった矢先、30代半ばで夫が経営する今の会社で働くことになった。社員を増やすのも大変な零細企業だった。経営が軌道にのるまで、経理、総務、コンピュータ…と、なんでも屋で手伝い、2~3年したら辞めて本業に戻るつもりでいた。しかし、その数年で、会社の現業、国際協力が本業になった。

少し大袈裟ではあるが、保健医療という分野に魅せられた。国際協力には、道路やダム of 建築、灌漑事業などもある。これに対して、保健医療の特徴は常に人間が対象であることだ。たとえば、母子保健は誰もが安全に生み、生まれ、生きるため、定期予防接種は幼い児に確かな人生を歩ませるための努力に他ならない。社会で取り組むそういう努力を、総じて「保健開発」という。これにハマった。40歳間近くして、初めてやりたいことがみつかった。

問題は専門性だった。同業者には看護師、薬剤師、臨床検査師などがいて、留学経験者や大学院卒もいた。英文科卒の私にそういう専門性は皆無だった。被援助国のカウンターパートのほとんどは医師で、何かというと「What's your background?」と聞かれ、「Being a mother!」と明るく答えたりしたが、肩身は狭かった。40歳になったある日、仕事で知り合ったジンバブエ人医師が、自分は今50歳、最近博士号(Ph.D)をとったと言い、Ph.Dなんか君ならすぐとれる、君にはあと10年もあるじゃないか、と励ましてくれた。しかし、当時の自分にはこれから大学院へ行くなどあり得なかった。ただ、現実的な勉強はした。国連機関の文書を読み漁り、必要あれば、疫学、医学の専門書も紐解いた。少しずついろいろなことが分かるようになった。ある時、パキスタンの国立保健研究所の学者と仕事をした。その頃、パキスタンではクリミア・コンゴ熱のアウトブレイクが生じていた。当時の私はまだその感染症を知らなかった。彼は、医学の専門用語は使わず、中学生でもわかるような簡単な単語を選び、しかし内容は実に完璧な説明を私にしてくれた。この人の知識と経験の奥深さに感じ入った。正真正銘の専門家はこういう説明の仕方ができるのだ、と感動した。こういう風になりたい、タレントに憧れる少女のようにそう思った。

40代の自分は、遠い国へ行くことも、新しい知識を学ぶことも苦ではなく、保健開発にのめり込んだ。家には思春期の子どもがいて、仕事も家庭も目まぐるしかった。50歳の声が聞こえる頃になると子どもたちも成人し、経済的にも少し余裕ができた。そんな折、昔と違って大学院が社会人に大きく門戸を開いていることに気づいた。ジンバブエの友人のあの日の言葉が蘇る。不可能だったはずの、仕事の傍ら大学院へ通い修士号、博士号を取得する、ことが実現した。その結果、海外のプロジェクトサイトで「ドクター・アベ」を名乗り、保健学の専門家として働くようになり、信じられない速さで時が流れた。

それにしても「セカンドライフ」というのはピンと来ない。第2の人生、定年退職後の人生と言われても、私の場合、「定年」は過ぎたのに「退職」はできていない。そもそも本業は第1番目の職業ではない。いや、ファースト、セカンドの区別が難しいのは私だけではないだろう。すでに若い世代の転職は珍しくなくなったし、定年になっても退職できない/しない人はもっと増えていくだろう。コロナ禍のテレワークは、自分の時間のなかで仕事と生活のバランスをとることの重要性を多くの人に気づかせた。自分のやりたいことは、セカンドライフというより、一生涯、つまり、ライフタイムというスパンで考えていく方が良いのではないか？引退などしたらやることなくて困りますよ、とよく人が言う。いや、私は困らない。やりたいことは沢山ある。晴れて引退できた暁には、次は海外ではなく日本の役に立つ（と思える）ことをしたいという気がしている。

何故私は会社を辞め NPO で活動しているのか

白石和彦

NPO 法人二枚目の名刺 サポートプロジェクト事業ユニット 事務局

■“79 から 2 “への衝撃—「孤独」の現実

この数字は何を表しているのでしょうか？これは私の早期退職前後のメール受信数です。退職前は一日あたり 79 通も受信していたのに対して、退職後は3ヶ月間でたったの2通しか受信しなかったという現実を表しています（共に会社関連のみ）。「会社を辞めたのだから当たり前」ですし、定年後について書かれた書物にも「定年後の状況」として示されている事が起こったわけです。退職後も会社の仲間から連絡が来るかな？という期待がなかった訳ではないのですが、自分を振り返れば、退職された先輩方には

連絡はしなかったな…と気が付きました。知らない間に「会社＝社会」となり、社外の繋がりが全くなかったら、退職後に待っているのは「孤独」だったのだと実感しました。

■パラレルキャリアそしてネクストキャリアへー全ては「内省」から始まった

私は本業の傍ら 2014 年から「NPO 法人二枚目の名刺」（以下弊団体）で活動しており、定年後も「孤独」にならず、団体の仲間や、そこで繋がった多くの人達と毎日楽しく活動しています。こんな私も 50 才までは学生時代の友人以外に友達はおらず、家と会社の往復の毎日でした。そんな時会社の「キャリア研修」に参加する機会があり、今思えば全てはここから始まりました。その研修は 50 才の社員が集まり、「内省」をし、今後の自分の人生（公私共）を考えるというものです。それまで、忙しさにかまけて自分の今後など漠然としか考えて来なかった私にとって、それは大きな転換点でした。最終的に「今後の人生は感謝と恩返しで生きて行く」と宣言し、研修を終え具体的な活動を模索することになるのです。しかし、いざ「恩返し」と言っても、そうそう具体的な行動に移せるわけではありません。「公」の部分では「メンバーの育成」「担当業務の継続拡大」というものがあつたとしても、「私」の部分での「恩返し」探しには苦勞しました。自分が本当にやりたい恩返しとは何か？を自らに問い、「学び直し」「社会貢献活動」等色々な情報収集をしている最中、「社会貢献部」の担当から紹介されたのが、弊団体だったのです。

■鎧を脱いで「会社人」から「社会人」へー「二枚目の名刺」サポートプロジェクト

「世の中をもっと良くしたい」という「想い」を持った背景の異なる社会人と、ビジョンやミッションをもとに社会課題に真摯に取り組む団体（NPO 等）とが「想い」で繋がり、その課題解決に取り組む 3 ヶ月間のプロジェクト。これを、「二枚目の名刺サポートプロジェクト」（以下 SPJ）と呼びます。私は「世の中への恩返し」としてこれに参加しましたが、最初は正直参加するかどうか悩みました。何故なら、「参加者は 20～30 代だろう。50 代のオジサンが会社とは違うフラットな枠組みの中で上手くやっていけるのか?」「NPO の方とは今まで面識が全くなくどんな風に接すれば良いのか?」と考えたからです。色々悩みましたが、結果「やってみなくちゃわからない」という思いで飛び込みました。飛び込むに際しては、以下の三つの事、①年上だからと言って、威張らない。偉そうにしない。上から

目線にならない。(会社人としての鎧を脱ぐ)②一社会人として若手から学ぶ姿勢で臨む。③チームの中では前に出ず、アンカー(錨)的な役割を果たす。を心掛けました。この様な心構えで臨んだ SPJ の3ヶ月は、私のその後の人生に大きな影響を与える程のインパクトがあったのです。支援団体の代表の課題解決に向けた「想い」や「熱量」は、それまで私が会った人の中で間違いなく NO.1 でしたし、これが NPO の代表なんだと感じさせてくれました。また、共に活動した仲間からは、一人一人に向き合う、理解する、という大切さを学びました。これは本業でのマネジメントに大いに活かすことができました。

■人生は本当に 100 年か？—本当に好きなこと、ワクワクすることをやろう！

初参加の「SPJ」を終えた私は、そのインパクトの大きさ故ある種の喪失感を覚え、「自分の様な経験を多くの人に」の思いから、SPJ デザイナー(プロジェクトの伴走役)として弊団体に参画する事を決め、その後事務局を担当する事となります。一参加者から運営側にまわったわけです。パラレルキャリアで7年その後2年の専任期間を経た今、「大変だったけど本当にやって良かった」という声を、参加社会人と支援団体から聞くにつけ、私は私なりの立場で誰かのお役に立っているのかなと考えています。自分が好きなこと…皆さんはすぐに答えられますか？私の好きなこと…それは誰かのお役に立つこと。誰かを笑顔にすること。今はっきりとそう言えます。人生 100 年と言われて久しいですが、本当に人生は 100 年なのでしょうか？確かに長寿は皆の願うところではありますが、私は身体も思考も元気な、「健康寿命 75 才」をひとつの目安に活動して行こうと考えています。2023 年を 60 才で迎える私にとって、弊団体での活動が 10 年目の節目の年となり、健康寿命 75 才まで 15 年という区切りの良い年となります。これから迎える 15 年、新たな「好きな事」を見つけ、挑戦しようと思うと今からドキドキワクワクしています。二枚目の名刺への参画、早期定年退職、これは家族の理解とお金の計算(笑)がなければ到底できませんでした。2023 年は家族会議(妻との 1on1)が増えそうです。

【書評】『キャリア探索とレジリエンス

—大学生に向けた効果的なキャリア支援とは—』

『キャリア探索とレジリエンス

『一大学生に向けた効果的なキャリア支援とは』

(湯口恭子 (著) 晃洋書房 2022)

<http://www.koyoshobo.co.jp/book/b601516.html>

高丸理香 (お茶の水女子大学)

本書の魅力は、「キャリア探索」「レジリエンス」に関連する丁寧な理論や知見の概観に基づいた「実証研究」という点はもちろんあるが、それ以上に研究成果をキャリア教育・支援につなげようとする「実践的応用へ向けた取り組み」が見え隠れするところにある。おそらく、筆者が、社会保険労務士、1級及び2級キャリアコンサルティング技能士、学校心理士、産業カウンセラーなどの多くの資格を活かしながら、新入社員研修講師、行政の労働相談・メンタルヘルス対策支援、大学のキャリア教育やキャリアカウンセリングに携わってきた経験があるためであろう。

本書の構成は、第I部：先行研究の概観と研究の目的、第II部：キャリア探索とレジリエンスにおける実証研究、第III部：研究の総括と提言となっている。通常であれば、第I部を参照しつつ第II部をじっくり読み、それを踏まえて第III部へと読み進めるが、今回は、筆者ならではの実践的提言がどのようなものかを知りたい気持ちを抑えきれず、まず第III部第8章「4:本書から示唆されるいくつかの視点と今後の展望(pp.116-117)」からページを開いた。

結論から述べると、①レジリエンスを育むための機能の一つとしてのキャリアカウンセリング、②個人差に合わせた多様なサポートの場としてのキャリアカウンセリング体制、③大学入学前(小・中・高)からの系統的なキャリア教育の必要性、④大学生に加え高校生などへのキャリア探索の促進やレジリエンス育成の拡大など、たくさんの有益な示唆があった。しかし、個人的に期待していた今後の実践や具体的な取り組みに焦点化した提言はシンプルにまとめられており、筆者の豊富な経験があるからこそその魅力が十分に伝わらないような物足りなさを感じた。博士学位論文の書籍化にあたってはさまざまな制約があることは理解しているが、「本」は学術的な部分だけではなく、筆者の“ひと”や“おもい”も反映させることができる最大のチャンスである。ぜひ、本書に続く第2弾として、筆者自身の経験を遠慮なく語った学術書を期待している。

ここまで個人的な興味からの見解を述べてきたが、本書の目的である実証研究には興味深い結果が多く明示されている。たとえば、「第4章:大学生のレジリエンスとキャリア探索」では、キャリア探索の探究活動としての「自己探索」と「環境探索」を「学年の違い」に着目して検討するうえ

で、「環境探索」の尺度項目に「インターンシップや具体的な就職活動」を考慮したプロセスは筆者ならではのセンスである。そのゆえに、「環境探索」では学年の違いがある一方、「自己探索」には学年間に有意差がないといった結果を得ることができ、「自己探索」と「環境探索」は異なる役割を持つ (p.49)」ことを明らかにしている。さらに、「第5章：ロールモデルとレジリエンスがキャリア探索に及ぼす影響」にてロールモデルが「環境探索」に直接影響しておらず、「1～2年生にとって、ロールモデルの存在だけでは、一歩踏み出す行動につながらなかった可能性 (p.60)」があるとの指摘は、今後のキャリア教育に関連した授業設計にも非常に有用な検討材料となる。また、「第6章：キャリア探索と就職活動中の取り組みが内定後の満足・意欲と不安に与える影響」では、不採用経験後の「他者への自己開示」に男女差が認められ、男らしさへの呪縛に言及した考察を行っており興味深い。

さいごに、本書を手にとった際には「おわりに」を読んでいただきたい。博士学位論文が学生と教員との学術的コミュニケーションを通じた集大成として世に送り出されるものであることが伝わるメッセージになっている。

【書評】『キャリア・カウンセリング・エッセンシャルズ 400』

『キャリア・カウンセリング・エッセンシャルズ 400』

(日本キャリア・カウンセリング学会 (監修) 金剛出版)

<https://www.kongoshuppan.co.jp/book/b602597.html>

市村美帆 (和洋女子大学)

本書の中でも説明されているが、「日本で初めてのキャリアカウンセリングの本格的な総合辞典」であり、キャリアカウンセリングについて、体系的に理解できるように構成されている。具体的には、大項目として、「Ⅰ. メンタルヘルス」、「Ⅱ. キャリア形成支援」、「Ⅲ. カウンセリングの理論と方法」、「Ⅳ. 組織と人的資源管理」、「Ⅴ. 資格と法制度」の5つから構成され、1頁に1項目、合計403項目が掲載されている。また、本書の活用方法として、「資格取得や実践力向上に向けた学習中にわからない用語がでてきたら本書で調べて、関連する用語を体系的に広げて知識量を増やす」に加えて、「興味あるテーマ、項目を通して読むことで「メンタルヘルスケア」などの5つの領域をそれぞれ体系的に理解する」といった活用法があった。私自身は、キャリアやカウンセリングの知識が乏しく、先に述べた

大項目および、その下にある中項目を手掛かりとして、テーマごとに読み進めてみた。

「I.メンタルヘルス」では、「精神疾患」の「うつ病」の項目からはじまり、「多様化するうつ病」の項目へと続いていた。本書は辞典であり、1頁に1項目という理解しやすい構成となっていることが魅力であるが、内容に応じて、2項目に展開するといった設定がさらに理解を深めるものになるように感じた。またその後、「発達障害」、「生涯発達心理学」、「ストレスチェック制度」、「職場復帰支援」、「危機対応」、「研修会」、「両立支援とWLB」、「支援機関との連携」の中項目が設定されていた。日頃、「〇〇心理学」といった心理学における分野別の授業が設定された環境で教育活動をし、そのような枠組みに慣れている大学教員の私にとっては、臨床心理学に限らず、発達心理学や産業・組織心理学などに話が展開していくといったように感じ、新鮮であった。キャリアカウンセリングが扱う分野の幅広さを改めて実感した。

「II. キャリア形成支援」では、「社会的意義・倫理」からはじまり、「キャリア理論」に関わる様々な研究者や提唱された理論が取り上げられ、その後「企業領域」や「需給調整領域」、「学校領域」、「地域・福祉領域」といった現在のわが国の現状や各機関や施設に触れた展開は、読み応えがあった。また、「III. カウンセリングの理論と方法」は、「精神分析的方法」や「人間性心理学・交流分析」、「認知行動療法」など7つの中項目が設定されており、丁寧にカウンセリングの理論が説明されていた。「IV. 組織と人的資源管理」では、「組織」や「人事制度」など12の中項目が設定されており、産業組織心理学分野で扱われる組織や人的資源管理の枠組みで展開されていた。「テレワーク」の項目では、近年の新型コロナウイルス感染症の流行に触れた記述などもあった。「V. 資格と法制度」はさらに丁寧に項目が設定され、労働、雇用、教育に関わる法律、キャリアカウンセリング関連機関や団体を取り上げられていた。

最後に、総合辞典である本書を読むことは、時間を要するものであったが、本書を読むことによって、キャリアカウンセリングに不可欠な5つの領域を捉え、関連用語を総合的・体系的に理解するのに最適な一冊であるということに納得している。前述したように、5つの領域(大項目)には、中項目という枠組みによって小項目が整理され、キャリアカウンセリングの基盤となる研究や理論、著名な研究者、法律、関連機関や団体など、総合的に理解することができた。加えて、各小項目では定義や基本的な考え方など基礎的な部分に触れつつも、知見が積み重ねられたり、議論が進んだことで変化した内容であったり、現代社会の問題や近年の状況にも触れ

ているため、キャリアカウンセリングの最新の知識を得ることができ、体系的に理解することができた。個人的には、すべてのページではないものの、各頁に付け加えられている「【文献】」は本文中に引用されている引用文献だけではなく、参考文献として掲載されているものもあり、本書で調べた後、さらに詳しく調べようと思った際の手がかりとなるようにも感じた。様々な立場で、キャリアカウンセリングに関わる全ての方々には、ぜひ手元に1冊置き、活用していただきたい。

【書評】 *Diversifying Schools: Systemic Catalysts for Educational Innovations in Singapore*

*Diversifying Schools: Systemic Catalysts for Educational Innovations
in Singapore*

(Hung, D., Wu, L. and Kwek, D. (eds.) Springer 2022)

<https://link.springer.com/book/10.1007/978-981-16-6034-4>

京免徹雄（筑波大学）

本書（邦題『多様化する学校：シンガポールにおける教育革新に向けたシステムの触媒』）は、シンガポールがメインストリームの学校、専門中等教育学校（スポーツ、技術、教育など、特定の分野に重点を置く特別校）、フューチャースクール（教育省と情報通信開発庁が共同で立ち上げた ICT 活用推進校）において、構造化された環境の中で多様な実践を可能にする方法を検討することを目的としている。

「アジア太平洋地域の教育：課題・関心・展望」シリーズの第 61 巻として刊行されており、全 19 章が 5 つのパートに分けられている。このうち、16 章「日本における上越市の模範的なキャリア教育実践」(Exemplary Career Educational Practices of Joetsu City in Japan) は、三村隆男会員（早稲田大学）と本学会ともかかわりの深い Darryl Takizo Yagi 氏（元兵庫教育大学）によって執筆されている。本稿では、全体を概観した上で、16 章に絞って内容を紹介し、その意義について言及したい。

第 1 部「イノベーションの多様な導入に関する事例研究」（1～4 章）で

は、生徒の多様な能力や興味に応じるために、シンガポールがどのように ICT を活用してきたのか先進事例が紹介されている。学校改革を進めるためには、学校の生態や社会的文脈への配慮、リーダーシップなどが必要であることが示されている。

第2部「学校からみた多様な変化」(5～8章)では、学校単位の卓越した取組を分析することで、どのようなリソースやプロセスによって、ニーズに合わせた持続可能な変化を実現できるか考察している。

第3部「システムからみた多様な変化」(9～15章)では、学校のリーダーシップ、教師の能力開発、企業との連携などに注目し、学校全体の変化と新しい学習文化の創造の土台となるシステムについて検討している。

第4部「国際的な視点」(16～18章)では、シンガポールの政策と他国の制度との共通点と相違点を理解することを目的に、教育現場の多様性を促進するために海外の学校が採用した戦略が示されている。具体的には、日本のキャリア教育、アメリカ(ニューヨーク)における教育改善、イギリスにおけるイノベーションに影響を与える要因のアセスメント、に焦点が当てられている。

第5部「まとめ」では、各章で紹介されたイノベーションとイニシアチブを統合し、シンガポールにおいて21世紀型の学習志向のコミュニティをどのように構築していくか提案されている。

以上が本書の概要である。ここからは、第16章「日本における上越市の模範的なキャリア教育実践」に目を向けてみたい。新潟県上越市が総合教育計画に基づき、プロジェクト型のキャリア教育を本格的に導入したのは2006年のことである。その象徴ともいえるのが、「未来を自分で創る」ことを目標とした2つの「チャレンジ」である。

1つ目は、「上越“夢”チャレンジ」である。文部科学省によるキャリア・スタート・ウィークの措定を契機に発足した実行委員会は、中学校校長会、教育委員会、商工会議所等と連携して、職場体験の効果的な実施方法を模索した。その結果、市内の全中学校22校の2年生が多様な職場において、同時期に5日間の体験を行う体制が整備されたのである。生徒と事業所とのマッチングはキャリア教育支援ソフト(スクールオフィス)で行われ、体験期間中の日誌もこのソフトを通して入力され、関係者に即時にシェアされる。また、社会人講話、職業レディネス・テスト、自己PRカード作成、体験学習発表会など豊富な事前・事後指導と組み合わせることで、職場体験を一過性のイベントではなく体系的な学習プログラムに昇華させた。

2つ目は、「チャレンジショップ Rikka」である。もともとは、地元の商

業高校の生徒が、起業体験および商店街の活性化のために立ち上げた店舗であるが、ここに小学2年生、中学1年生、大学生も加わり、縦割りによる地域密着型のキャリア教育プロジェクトとなった。高校生がマーケティング、生産、商品発注、販売、会計といった業務の企画を担い、中学生は人事・総務、営業、販売促進、広告、店舗デザインの5つの部署に分かれて、経営をサポートした。小学生は自分たちで育てたり、収穫したりした野菜を販売するという形で参加し、大学生も店舗運営に協力した。この事例は、地域の文化と資源を活用して持続可能な教育改革を行うことで、子どものキャリア発達と都市経済の活性化を両立できることを示している。

最後に、本書に第16章が存在することの意味について、評者の見解を述べたい。上越市のプロジェクトは、草創期のキャリア教育を牽引してきたグッド・プラクティスであり、それが今日まで継続されていることを国際発信したインパクトは決して小さくないだろう。特に日本のキャリア教育実践は海外ではあまり知られておらず、地域コミュニティと連携したキャリア教育が小学校段階から実施されていることを世界に認識してもらったのではなかろうか。

評者も大学院生の頃に何度か上越市を訪問し、2つの「チャレンジ」を視察させていただく機会があった。教師はもちろん、行政や地域住民の方々の次世代育成に対する「熱量」に圧倒されたことをよく覚えている。16章にはまさにその頃（2000年代後半）の状況が描かれているが、その後の新たな展開にも興味を湧いてくる。

本書は、シンガポールにおいて子ども1人1人の多様なニーズに応じる教育改革・学校改革を促進することを目的に企画された。小学校卒業試験の結果に応じて進路を振り分けるシンガポールの教育モデルは、ウルトラ・メリトクラシーによって、卓越した人材育成を追究してきた。事例の対象になっている専門中等教育学校やフューチャースクールもいわゆる「エリート校」である。そのような国の研究者・実践者の目に、ボトムアップ・草の根で発展してきた上越市の地域密着型キャリア教育は、どのように映るのだろうか。双方向のさらなる国際交流が、期待される場所である。

このように、本書は日本のキャリア教育実践について国際的な視野で捉え直すことができるという点でも、示唆に富んでいる。やや高価な本ではあるが、図書館などで多くの会員の目に触れることを願っている。



第44回研究大会のご報告

第44回研究大会実行委員会
渡部昌平（秋田県立大学）

皆様のご理解とご協力をおもちまして、2022年11月12日(土)13日(日)開催の第44回研究大会が成功裏に終了しましたことを、まずもって感謝いたします。参加者実数約220名（オンライン開催のため正確には把握できず）、口頭発表49本、ポスター発表12本、基調講演2本、大会企画シンポジウム1本、委員会企画シンポジウム2本、会員企画シンポジウム1本、学会発表優秀賞対象論文16本は例年並みか例年より少し少ないくらいとのことでしたが、継続するコロナ禍により途中で対面開催からオンライン開催に変更した中で、概ね例年なみの規模で開催できたことは、ひとえに皆様のご理解とご協力によるものと思っております。初日の基調講演・大会シンポジウムには140名近い皆様にご参加いただくことができました。本当にありがとうございました。実行委員会の不手際により1本の口頭発表の時間が取れなかったこと、一部の参加者のご所属等に誤記があったこと、参加・発表申込の様式が分かりにくかったことなど、大変申し訳なく思っております。伏してお詫び申し上げます。

今回のテーマ「心理的安全性」は今後ともキャリア教育分野で重要なキーワードになる可能性のあるテーマだと思っています。今後とも日本のキャリア教育や進路指導の発展・向上のため、皆様のご知識やご経験をお借りできれば、と思っております。

来年度以降の研究大会では、一参加者として皆さんとお会いできることを楽しみにしております。

◇日本キャリア教育学会ニューズレターは、日本キャリア教育学会情報委員会が発行し、特集テーマに沿った記事を会員の皆様にお届けするものです。

◇会員の皆様メールアドレス確認・登録を継続的にしております。まわりの会員でニューズレターが届いていない方がおられた場合、

学会事務局 (jssce-post@bunken.co.jp) 宛に受信用メールアドレスから登録申請していただきますよう、お伝えください。

◇ニュースレターに対する皆様のご感想・ご意見・ご提案を随時お待ちしております。情報委員会 (jssce-ic@googlegroups.com) までお気軽にご連絡ください。

◇キャリア教育関連の著作を発刊・発表した会員は、是非とも学会事務局まで献本いただければ幸いです。学会ウェブサイトにも書名と著者名を掲載した上で、書評欄で取り上げさせていただきます。

◇文中敬称略

日本キャリア教育学会情報委員会 発行
委員長：京免徹雄 副委員長：家島明彦
委員：市村美帆、高丸理香、竹内一真、
橋本賢二、本田周二、松尾智晶、
丸山実子、三保紀裕（五十音順）
